

部門ニューズレター



No.36

2017年11月10日発行

ISSN 2185-3177

目次

- [第95期部門長就任ご挨拶 \[神谷和秀\(富山県立大学\)\]](#)
- [第94期部門長退任ご挨拶 \[佐々木直栄\(日本大学\)\]](#)

- 活動報告
 - [部門講演会 No.16-49 講演会:「技術と社会の関連を巡って:過去から未来を訪ねる」 \[門田和雄\(宮城教育大学\)\]](#)

- 連載 わたしの「技術と社会」
 - [I came,I saw,I knew.: The great country, Bhutan \[Masanori Ogata \(Jigme Namgyel Engineering College, Royal University of Bhutan\)\]](#)

- [第95期委員会組織](#)

- [編集後記](#)

第 95 期部門長挨拶

部門長(第95期)神谷和秀

この度、技術と社会部門の第 94 期(2016 年度)佐々木直栄部門長(日本大学)からバトンを引き継ぎ、第 95 期(2017 年度)の部門長を務めさせて頂くこととなりました富山県立大学の神谷和秀でございます。歴代 23 人目の部門長として、副部門長の永井二郎先生(福井大学)と幹事の小宮聖司先生(神奈川工科大学)、そして、運営委員会委員の皆様とともに、本部門の円滑な運営とさらなる発展に努めてまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

技術と社会部門は、日本機械学会の中では 20 番目に設立された比較的新しい部門ではございますが、1991 年 9 月に発足してから今年で 26 年目を迎えます。多くの部門では、特定の技術、あるいは、分野に特化した活動を行っておりますが、当部門では設立当初より、特定の技術に特化せず、広い分野にまたがる領域を対象として活動を続けております。具体的には、人・技術・社会を核として、機械工学やその関連技術と我々人類が組織的な営みを行う社会との架け橋となる活動を行っております。

一方、最近では、産業面での競争力を強化する目的でイノベーションという言葉が散見されるようになっておりますが、このイノベーションの創出には、技術の融合、学際化、あるいは、文理融合などが必要だと言われております。また、日本機械学会の部門制が現在の形になって四半世紀が経過し、部門のあり方についても検討が始まっております。

このような中、当部門では、前述したとおり、設立当初から一貫して、理工系の学問や技術分野のみならず文科系学問分野を含めた大きな枠組みの中で分野横断的な活動を行っております。また、今後も、この方針を堅持して部門活動を行ってまいりたいと考えております。

さて、今期の部門活動としては、埼玉大学を会場として、9月3日(日)から6日(水)の日程で、年次大会が開催されますが、会期中には、「温めて動く機械スターリングエンジン」と題した市民フォーラムを開催いたします。また、機械技術史・工学史、工学・技術・環境教育の 2 つのオーガナイズドセッション、そして、「産業考古学シリーズ」と「戦後の技術開発史を語る」と題したワークショップを企画し、さらに、機械遺産のパネル展示も行います。

12 月には、日本工業大学を会場として、公益社団法人日本設計工学会との共催で、日本工業大学工業技術博物館後援会の協賛をいただき、2日(土)に部門講演会、3日(日)に見学会を計画しております。講演会では、技術教育・工学教育、エネルギー教育・環境教育、設計教育・CAD 教育、

埼玉地方の伝統産業技術と技術史、機械技術史・工学史の5つのオーガナイズドセッションと特別講演を実施いたします。また、講演会の翌日には、見学会として、NPO 法人発動機遺産保存研究会が管理する機械遺産「二段膨張式船舶用蒸気エンジン」を訪問する予定です。

また、明治大学理工学部駿河台キャンパスのリバティータワー内に会場を設け、2月を除いた毎月最終水曜日には、いつも同じ時間と空間で、イブニングセミナーを開催いたします。学術講演会とは趣を変え、専門家ではなく、一般の技術者が気ままに集える場として、講演会を行ってまいります。また、講師に了解を得て講演そのものを映像記録したイブニングセミナー・アーカイブズの活用方法についても検討を行ってまいります。

それから、2007年に当部門に機械遺産委員会が設置されて10年が経過しております。2016年には新たに7つの機械遺産が認定され、合計83件となっております。機械遺産委員会では、良い意味で定常化した認定事業を粛々と継続し、貴重な機械遺産の認定ならびに後世への伝承に取り組んでまいります。また、安定して継続的に認定事業を行っていくためには、若手人材の発掘や育成に取り組んでいくことが懸案事項だと考えております。

ICBTT(経営と技術移転に関する国際会議)を2002年から隔年で開催しております。最近では、関係各位の並々ならぬご尽力によって運営も安定してまいりましたが、国内からの参加者の減少が課題となっております。2018年に9回目となる会議をどのような形で実現すれば良いかを検討してまいります。

2008年から実施しております技術者倫理セミナーは、11月11日に第19回を開催予定です。また、同じく2008年に部門登録メンバが協力して開始した新☆エネルギーコンテストは、2011年に部門主催の行事となり、10月21日には第10回の節目となる開催となります。

最後になりますが、以上の活動を継続的に行っていくため、部門運営を統括するメンバを安定して組織できるような仕組みづくりについても取り組んでいこうと思っております。そこで、部門を支持し、また、期待を寄せて当部門に登録していただいている皆様方におかれましても、部門の裾野拡大のため、お知り合いの方へ広くお声掛けをお願いしたいと思っております。精一杯努力してまいりますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

(富山県立大学 工学部 知能デザイン工学科 教授 神谷和秀)

日本機械学会技術と社会部門ニュースレター: <http://www.jsme.or.jp/tsd/news/index.html>

日本機械学会

技術と社会部門ニュースレターNo.36

(C)著作権:2017 一般社団法人日本機械学会 技術と社会部門

活動を振り返って

前部門長(第94期)佐々木直栄(日本大学)

本年度(第95期)の毎年恒例行事も残すところ、第10回新☆エネルギーコンテスト(10/22, 於 日本大学工学部)と部門講演会「技術と社会の関連を巡って:過去から未来を訪ねる」(12/2, 於 日本工業大学)を残すだけになりました。この時期に、前部門長として、第94期の活動を振り返るとき、脳裏に浮かぶのは、苦難を強いられた活動であることは言うまでもありません。以下に、それらを私なりに振り返ってみます。

2016/5/12付で、本会創立120周年記念事業委員会10年のあゆみ編纂小委員会委員長から、創立120周年記念「日本機械学会 最近10年のあゆみ」原稿執筆の依頼メールが届き、2017/3/31までに原稿を提出するように求められました。例年の機械工学年鑑の執筆だけでもそれなりの負荷があるのに加えて部門の10年のあゆみをまとめなければならないこと、原稿提出締切が機械工学年鑑よりも早いこと、私自身が執筆期間中に約3ヶ月間派遣研究員として渡米しなければならないことなどを考えると、不安でたまらない思いでしたが、10年間の機械工学年鑑の内容を振り返ることをベースに、執筆作業を進めました。構成は、「概観」、「工学・技術教育」、「技術史・工学史」、「機械遺産認定」、「産業遺産・技術遺産」および「技術者倫理」とし、執筆者は、機械工学年鑑の常連執筆者(後述)の先生方に加えて、部門三役が適宜参加・支援する形にしました。ほぼ期限通りに原稿を提出できたのは執筆者各位のご協力の賜物と感謝しております。

2016/7/28付で、本会技術ロードマップ委員長から、「2050年の社会像を描いた各部門のビジョンの作成」依頼メールが、ロードマップ委員向けに送付され、8/31までに検討結果を提出することが求められました。容易ではない依頼内容を前に、途方に暮れる思いを押し隠して、参加することに意義があると信じ、小野寺英輝(岩手大学)本部門ロードマップ委員長、神谷和秀(富山県立大学)副部門長および高橋芳弘(千葉工業大学)幹事とともに、原案作りに取り組み、期日までに検討結果(図1参照)を提出することができました。内容は荒削りなものでしたが、本会組織の横串的役割を担う本部門らしい内容であることを高く評価され、更なる精査を求められたことは大きな前進だったと感じております。

2016/10/14には、本会広報情報理事より、「機械工学年鑑」2017執筆者選定の依頼が届き、2017/1/20までに題目・執筆者リストの提出が求められましたが、例年お願いしていた先生方から諸事情による執筆辞退の連絡が相次ぎました。途方に暮れかけていたところ、緒方正則(元関西大学)学会連携(日本技術史教育学会など技術史教育関連学会)担当委員から執筆者リストを提案いただき、石田正治(名古屋工業大学)運営委員と小野寺英輝(岩手大学)機械遺産委員会副委員長

技術と社会部門が考える2050年のビジョン

“自給自足社会の再現”を例に

- 2050年までに日本の人口は2010年ベースで約24%減少し、1億人を下回ることが予想されている。人口減少の改善はその後も期待できない現状では、産業の海外流出も加速され、このままでは貿易赤字が増大する可能性が大きい。この対策として、江戸時代に実現していた自給自足社会の再現が必要となる。国土の75%を山地が占め、世界でもトップクラスの森林率を誇る日本としては、森林資源の有効利用が重要課題となる。

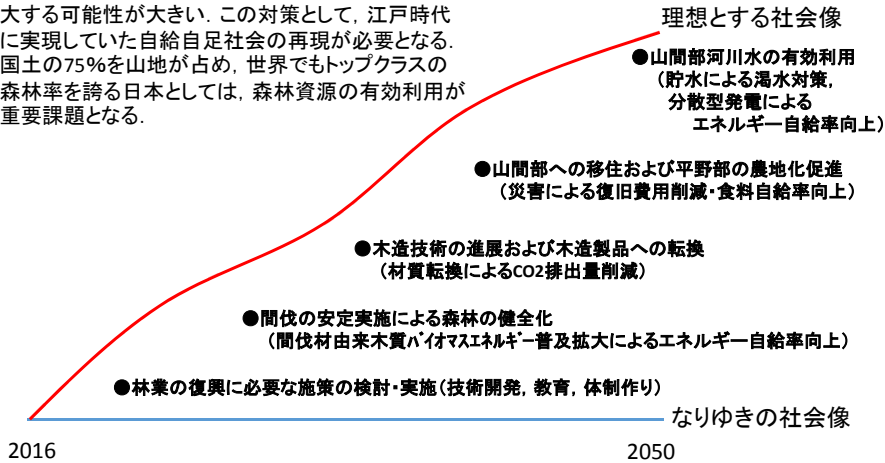


図1 2050年の社会像を描いたビジョン一例(著者案)

に急遽加わって頂き、滞りなく原稿×切(2017/4/21)・公開(2017/8)に間に合わせることができました。常連執筆者である佐藤智明(神奈川工科大学)工学・技術教育委員会委員長や高田一(横浜国立大学)技術倫理委員会委員長にも深く感謝の意を表したいと思います。

2016/11/26に開催された部門講演会は、ホームページ立上げ段階から多少の躓きがあったり、講演申込数の伸び悩みがあったりで、一時はどうなることかと心配しましたが、門田和雄(宮城教育大学)実行委員長をはじめ、関係各位の多大なご協力により、成功裏に終えることができました。また、例年、部門講演会の翌日に開催されている見学会も、星朗(東北学院大学)幹事をはじめとする本会東北支部の関係者の皆様のご協力により、思い出に残る素晴らしい行事にすることができました。本当にありがとうございました。

上述したように、時系列で困難を乗り越えた出来事をまとめてみると、意外に細かな記憶は飛んでしまっていることに気づきました。ただし、一つの困難を乗り越えた自信を頼りに、また新たな困難に立ち向かっていけたことだけは確かだと感じています。本部門の行く手にはこれからも多くの困難が待ち受けているかもしれませんが、部門に関係する皆様の一致団結したご協力があれば、乗り越えられない困難は無いと信じています。本部門の益々の発展を祈念して、これからも一部門関係者として精進していく所存ですので、よろしくお願いいたします。

日本機械学会技術と社会部門ニュースレター: <http://www.jsme.or.jp/tsd/news/index.html>

日本機械学会

技術と社会部門ニュースレターNo.36

(C)著作権:2015 一般社団法人日本機械学会 技術と社会部門

「技術と社会の関連を巡って:過去から未来を訪ねる」

宮城教育大学
門田和雄

2016年11月26日(土)に技術と社会部門恒例の2016年度部門講演会が仙台市にある宮城教育大学において、日本設計工学会との共催行事として開催された。以下それについて報告する。

1. 開催までの経緯概要

前年に東北地区での開催までは決まっていたものの、会場が定まらないということで、仙台に赴任して間もない門田が宮城教育大学を会場に引き受けることとなった。本部門講演会を国立の教育大学で開催するのは初めてだと思われる。小規模な大学で機械系の教員が1名しかいなかったため、会場関係の仕切りはすべて門田が行った。加えて、申し込みのウェブサイトの管理なども行い苦勞が絶えなかったが、日本機械学会の秋山宗一郎様にお手伝いいただき、開催の運びとなった。

2. 開催日

2016年11月26日(土) 参加人数 41人

3. 会場

宮城教育大学教育学部 3室

4. 講演内容

OS機械技術史・工学史の講演が3件、OS設計教育・CAD教育の講演が6件、OS技術・工学・環境教育の講演が17件、合計26件の講演があり、活発な質疑応答が交わされた。

特別講演では、『仙台文化遺産「亜炭と埋もれ木」』と題して、美術家の伊達伸明氏をお招きして、会場がある青葉山付近でかつて採掘されていた仙台亜炭及び埋もれ木に関する貴重なご講演をいただいた。

5. 懇親会

仙台駅近くにある、和洋創作Dining 鈴～Rin～において、20名が参加し、懇親会が盛大に開催された。

6. 謝辞

少人数での準備であったが、当日は学生アルバイトの手伝いなどもあり、スケジュール通りの運営ができ、ホッとしている。仙台周辺では週末のイベントごとに宿泊先の確保が難しいという問題が発生しており、今回も大規模な駅伝大会が開催されるなか、宿泊先の確保に苦労されたというお話も伺った。そのような中、多くの方々にご参加いただきました。厚くお礼を申し上げます。



宮城教育大学 正門



美術家の伊達伸明氏による特別講演の様子

日本機械学会技術と社会部門ニュースレター: <http://www.jsme.or.jp/tsd/news/index.html>

日本機械学会

技術と社会部門ニュースレターNo.36

(C)著作権:2017 一般社団法人日本機械学会 技術と社会部門

I came, I saw, I knew. The great country, Bhutan

Masanori Ogata

(Jigme Namgyel Engineering College, Royal University of Bhutan)

Introduction

Bhutan and Japan celebrated the 30th anniversary of diplomacy in 2016. Tohoku earthquake occurred in March 2011. At that time, the Fifth King of Bhutan, Jigme Khesar Namgyel Wangchuk and Queen Jetsun Pema visited Japan first in the chief of state in the world in November. Their Majesties visited the disaster area and consoled the people. That is memorable event of Japanese.

Words that are often said about Bhutan in Japan include "The last Arcadia in Asia" or "A country where 99.99% of Japanese never visit once in a lifetime". And the most frequently referred is "The country whose national standard is GNH than GDP". How is going on realness of "Happiness"?

Since I had some relationships with Bhutan, I am staying in Bhutan as a foreigner hired from the first of August 2017 until the end of June 2018. Here, I will write my current experiences.

1 From encounter with Bhutan to the present

1.1 It started in hot Kyoto

I remember that the encounter with Bhutan is not so old, it started on 7 July, 2013. Mr.Hajime Shirai (Representative of NPO SECONEQ), he is a member of JSEHT and had been the achievement as the technical instructor for road paving construction in Bhutan actually since 2003.

I received an information from him in June, 2013 that he will take the president of Jigme Namgyel Polytechnic (present College: JNEC) belonging Royal University of Bhutan (RUB) to Kansai area. The purpose was visitation and researching the companies of Panasonic Corp., Yanmar Co., Ltd and solar power generation stations and meeting with widow Ms. Satoko Nishioka. Her husband is the late Dasho Nishioka (Keiji Nishioka). He is respected as "Father of Agriculture in Bhutan" after his death in Bhutan.



Director of JNP visited Ms. S.N. “Ama” at Bhutan House on 12 July 2013

At this opportunity, tours of Buddhist temples in Kyoto and Nara were also included in order to get him to understand Japanese Buddhism culture. Because the Bhutanese is the pious of Tibetan Buddhism.

Although it was included in the schedule, visits by Kansai University were requested informally. I did not know the reason why they request a tour of facilities of the department of mechanical engineering in particular. This visit became the beginning of my current situation.

On 7th July 2013, Kyoto was very hot and was crowded with many tourists from inland and overseas. The person who got off the bullet train with Mr. Shirai, it is a rude way of saying, but I did not think him the president of the university because he looked like so young. But he was a good gentleman.

His name is Andu Dukpa. As I knew later, he was only 42 years old at that time. He studied in Canada and had acquired doctorate degree for Electric Engineering. During their staying in Osaka for eight days, I talked to him without restraint. But at JNEC where currently I am employed, he is very respected by academic staffs, office workers and students. But on another occasion, I realize that he is the dignified person. However, a lovely smile is very popular in the campus.

1.2 My first visit to Kingdom of Bhutan

By this private exchange in 2013, it became trigger, the First International Conference "ICESTEH 2017 Bhutan (International Conference on Engineering, Science, Technology, Education and History)" was held at the OVC of RUB (Office of Vice Chancellor, Royal University of Bhutan) and the Multi-Purpose Hall in the capital Thimphu on 21-22 August 2014. At that time, executive chairpersons were Mr. Shirai and President Audu Dukpa of JNP.



Group photograph of ICESTEH 2014 held Bhutan at Thimphu on 20-21 August

The conference was co-sponsored by this Division of Technology and Society of the JSME, so that Professor Hajime Takada (National Yokohama University) of the Dean of the division at that year gave a keynote address on "Engineer's Ethics". The addressed manuscripts have been reviewed by Western organizations and published as papers of 2015 Spring issue of the academic journal of BJRD (Bhutan Journal of Research and Development).

At the opening ceremony of the international conference in commemoration, Dr. Kazuhiro Hayashi of President of the JSEHT at that time (also, Professor of Emeritus, Osaka Sangyo University) and Representative of Tokyo Flower Association donated the list of fifty Japanese cherry tree seedlings to the RUB.

For details of this international conference, Professor Gao Feng of Nishinippon Institute of Technology has been reported in the Newsletter No.32 (2015)*, Division of Technology and Society, JSME. I am appreciated if you could refer to it.

* <http://jsme.or.jp/tsd/news/newsletter32/index.html/>

1.3 The importance of fulfilling promises

To realize that donated list, Mr. Shirai and members of Tokyo Flower Association, and a planting expert brought 50 cherry tree seedlings to Bhutan in February 2015. It was just one month before of my retirement of Kansai University (KU). They planted cherry tree seedlings in the vast area of OVC

of RUB in capital Thimphu. At this occasion, the representatives of all 11 universities affiliated with RUB gathered to capital and they learned how to plant and to grow up.



The first planting of cherry tree seedlings at OVC of RUB on 14 February 2015

(photograph taken by Hajime Shirai)

At the time of this visit, we discuss the international exchange between RUB and KU, and were asked for assistance to establish Bhutan's first four-year mechanical engineering department, that is of Bachelor course.

Because there was a prior consultation with RUB and KU, Associate Professor Junichi Kurata of department of mechanical engineering, KU was accompanied with me in this occasion.

He is also a member of committee of Division of International Exchange of KU, and is the recipient of the Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology Prize in following 2016 by practical improvement of education method. It can be said that he was an appropriate person for this matters.

The results of the two-day consultation, RUB and KU made a memorandum of understanding for International Exchange.

After that, discussions were conducted at both universities, they were in agreements.

On June 30, 2016, the signing ceremony of international exchange was held inviting Dasho Nidup Dorji of Vice Chancellor of RUB, and President Andu Dukpa of JNEC to Kansai University. Dasho or Darsho is an honorary title given by the king in Kingdom of Bhutan, and it refers to the name of

high-ranking official job title. It corresponds to English "Lord".



RUB and KU signed up International Exchange on 30 June 2016 at Kansai University

At that occasion, Mr. Shirai and I took them to the researching tours of companies with unique technologies in Osaka, Fukuyama, Fukuoka and Saga. Moreover, we visited on such as an example of using Japanese traditional ecological energy-saving technology in Kurume. Also, we took a guide to the evidence of Industrial Revolution of Kagoshima in Meiji era. Conversely, as an example of worst of technology to mankind, we also guided them to the hypocenter of Hiroshima.

In November 2016, in order to confirm the growing conditions of the cherry tree seedlings of the universities in various places including the OVC of RUB that planted in 2015, from the capital Thimphu to the southeast to JNEC of President Andu in Dewathang of the destination, Mr. Shirai, President Andu and I travelled on a mountain road of 800 km for 5 days enduring of great hardships.

In Bhutan, there is no traffic signal, railway, sea, tunnel, and there is almost no bridge that exceeds 20 m in span. So, it climbs up over 3000 m pass, goes down the valley and crosses the narrow river, and then climbs up the valley again. It happened continuous repetition. It was fortunate to have stayed at a guest house in university in a regional area. We used a four-wheeled car, although there are mobile phones if there happened a breakdown or gas shortage in the travel, it is disable to communicate in the deep mountain areas anywhere at all.

After reached to Jigme Namgyel Engineering College, we discussed three days for possibility to establish a new four-year Bachelor program based on the current Diploma course of two-years of department of mechanical engineering. After returning home, I reported to Professor Kurata of experts on the educational program. He decided to assist its formulation.

In addition, Mr. Shirai worked hard to encourage teachers from the JNEC to experience Japanese manufacturing technologies and to raise further skills, he applied two teachers as trainees to Nakayama Iron Works Co., Ltd. in Saga Prefecture. They are now under training in the company.



Journalist of “The Bhutanese” met with President of Kansai University on 18 May 2017

She was invited by Hajime Shirai and Ogata.

Two teachers from Department of Mechanical and Electric Engineering, JNEC are also present.

They are trainees in Nakayama Iron Works Co., Ltd., Saga Prefecture, Japan.

1.4 A few months to establishment

Based on the educational support of Kansai University, JNEC submitted the application documents for establishing the four-year mechanical engineering department BE program in consideration of regional circumstances to the Ministry of Education of Bhutan in November 2016 and finally it adopted in April 2017. However, at the end of October 2017, tough hearings have still been left for the details for syllabus of modules (subjects) and timetable of semesters, and facilities expansion plans.

I have been a pensioner since April 2017. As a result, I was decided hurriedly dispatching to the JNEC in Bhutan so that an advisor of consult on program for the bachelor course of mechanical engineering that should be established in July 2018.

Also, with a view to employment of graduates after five years, technology transfer from Japan companies become one of my jobs.

In the early Meiji period, Henry Dyer from Glasgow, UK was invited as the hired foreigner by Meiji Imperial Government. He founded the engineering college (presently, Faculty of Engineering, University of Tokyo) and made technology education. He is regarded as a great benefactor who created the foundation of present Japanese manufacturing technology. He prepared plans for detailed mechanical engineering education in advance and was visiting Japan. Dyer wrote his experiences to the book "Great Japan" after returning to Scotland.

Since I am deriding myself as "Henry zirconium; false diamond", I visited Bhutan without having any plan for advanced education like "Henry Dyer (1848-1918)". In Dewathang Village where there is JNEC (Jigme Namgyel Engineering College), it is the reality in here that "If there is nothing, it is no choice but to give up". Here, the environment that there is neither a vending machine nor a convenience store is a natural life.

The first thing that I came, I saw and I knew is the surprising and dense content of the engineering education. Also, there are many teachers and students who hope to study in abroad.

A summary of the first four years from 2013 to the present that I first met Bhutan is the height of barriers of Japanese universities to foreign students. There is a lot of doubt as to whether international exchange is nominal only and its actual condition is good. This is not limited to the university that once took care of me for 46 years when I was a student and teacher life. I recognized that there are problems with the system of accepting foreign students of Japanese universities.

The education system of Bhutan and the actual situation of everyday life continue to next newsletters.

	Masanori OGATA M.Eng., Assoc. Prof.	
Department of Mechanical Engineering Jigme Namgyel Engineering College Royal University of Bhutan Dewathang, Samdrup Jongkhar Kingdom of Bhutan		◇ JNEC Help Desk ◇ Tel: +975-07-260-302 Fax: +975-07-260-289
masanoriogata@jnec.edu.bt ogata.world@gmail.com		
http://www.jnec.edu.bt Mobile: +975-17445155		

日本機械学会技術と社会部門ニュースレター: <http://www.jsme.or.jp/tsd/news/index.html>

日本機械学会

技術と社会部門ニュースレターNo.36

(C)著作権:2017 一般社団法人日本機械学会 技術と社会部門

[第 95 期委員会組織]

第 95 期(2017 年度)技術と社会部門委員名簿(2017 年 10 月 25 日時点)

●2017年度 運営委員会 (第95期)

ID	役名	所属委員会等役名	氏名	勤務先名称
1	委員長	部門長	神谷 和秀	富山県立大学
2	副委員長	副部門長	永井 二郎	福井大学
3	幹事	部門幹事	小宮 聖司	神奈川工科大学
4	委員		大久保 英敏	玉川大学
5	委員		奥村 喜勝	(株) ホンダアクセス
6	委員		権上 かおる	元 (株) アグネ技術センター
7	委員		佐藤 智明	神奈川工科大学
8	委員		高田 一	横浜国立大学
9	委員		高橋 芳弘	千葉工業大学
10	委員		丹治 明	日本工業大学
11	委員		原村 嘉彦	神奈川大学
12	委員		八木田 寛之	三菱日立パワーシステムズ (株)
13	委員		綿貫 啓一	埼玉大学
14	委員		小林 義和	秋田工業高等専門学校
15	委員		西本 哲也	日本大学
16	委員		神保 祐一	(株) ドーコン
17	委員		竹澤 聡	北海道科学大学
18	委員		麻田 祐一	(株) アイシン・コラボ
19	委員		石田 正治	名古屋工業大学
20	委員		小島 透	愛知大学
21	委員		橋本 英樹	新和実業 (株)
22	委員		水谷 秀行	中部大学
23	委員		後藤 彰彦	大阪産業大学
24	委員		滝谷 俊夫	Hitz 日立造船 (株)
25	委員		中谷 彰宏	大阪大学
26	委員		野村 昌孝	神戸大学
27	委員		吉川 徹	東洋紡績 (株)
28	委員		池条 清隆	広島大学
29	委員		武田 知久	三浦工業 (株)
30	委員		若子 倫菜	金沢大学
31	委員		高藤 圭一郎	西日本工業大学
32	委員		戸越 勉	新日鐵住金 (株)
33	構成員	総務委員会委員	佐々木 直栄	日本大学
34	構成員	総務委員会委員	筒井 壽博	弓削商船高等専門学校
35	構成員	総務委員会委員	加藤 義隆	大分大学
36	構成員	総務委員会委員	吉田 敬介	九州大学
37	構成員	総務委員会委員	小西 義昭	K O P E L 小西技術士ラボ
38	構成員	総務委員会委員	村田 良美	明治大学
39	構成員	総務委員会委員	小野寺 英輝	岩手大学

●2017年度 総務委員会 (第95期)

ID	役名	所属委員会等役名	氏名	勤務先名称
1	委員長	部門長 講演会企画委員会委員長	神谷 和秀	富山県立大学
2	副委員長	副部門長	永井 二郎	福井大学
3	幹事	部門幹事	小宮 聖司	神奈川工科大学
4	委員	表彰委員会委員長 トピックス委員	佐々木 直栄	日本大学

5	委員	広報委員会委員長	筒井 壽博	弓削商船高等専門学校
6	委員	工学・技術教育委員会委員長	加藤 義隆	大分大学
7	委員	HP管理運営委員会委員長	高橋 芳弘	千葉工業大学
8	委員	機械遺産委員会委員長	吉田 敬介	九州大学
9	委員	ロードマップ委員会委員長 部門連携担当 (交通・物流部門)	小野寺 英輝	岩手大学
10	委員	国際会議実行委員会委員長	綿貫 啓一	埼玉大学
11	委員	イブニングセミナー企画委員会委員長	小西 義昭	KOPEL小西技術士ラボ
12	委員	イブニングセミナー実行委員会委員長	村田 良美	明治大学
13	委員	技術倫理委員会委員長 出版センター委員	高田 一	横浜国立大学
以下 部門長指名委員				
14	委員	2017年度 部門講演会実行委員会幹事	丹治 明	日本工業大学
15	委員	2017年度 年次大会担当委員	荻窪光慈	埼玉大学
16	委員	2018年度年次大会担当委員 学会連携担当委員 (技術史関連)	緒方 正則	元 関西大学
17	委員	学会連携担当委員 (日本設計工学会)	大高 敏男	国土舘大学

●2017年度 表彰委員会 (第95期)

ID	委員会名	役名	氏名	勤務先名称
1	表彰委員会	委員長	佐々木 直栄	日本大学
2	表彰委員会	幹事		
3	表彰委員会	委員		

●2017年度 広報委員会 (第95期)

ID	委員会名	役名	氏名	勤務先名称
1	広報委員会	委員長	筒井 壽博	弓削商船高等専門学校
2	広報委員会	幹事	関根 康史	福山大学
3	広報委員会	委員	滝谷 俊夫	Hitz日立造船(株)
4	広報委員会	委員	小宮 聖司	神奈川工科大
5	広報委員会	委員	加藤 義隆	大分大学
6	広報委員会	委員	高藤 圭一郎	西日本工業大学
7	広報委員会	委員	吉田 敬介	九州大学

●2017年度 技術倫理委員会 (第95期)

ID	委員会名	役名	氏名	勤務先名称
1	技術倫理委員会	委員長	高田 一	横浜国立大学
2	技術倫理委員会	委員	村田 良美	明治大学
3	技術倫理委員会	委員	小西 義昭	KOPEL
4	技術倫理委員会	委員	岡田 恵夫	オカダ・アソシエーション技術士事務所 (技術士会会員)
5	技術倫理委員会	委員	中村 昌允	東工大 (技術士会会員)

●2017年度 HP管理運営委員会 (第95期)

ID	委員会名	役名	氏名	勤務先名称
1	HP管理運営委員会	委員長	高橋 芳弘	千葉工業大学
2	HP管理運営委員会	幹事	加藤 義隆	大分大学
3	HP管理運営委員会	委員	高藤 圭一郎	西日本工業大
4	HP管理運営委員会	委員	小宮 聖司	神奈川工科大学
5	HP管理運営委員会	委員	神谷 和秀	富山県立大学
6	HP管理運営委員会	委員	若子 倫菜	金沢大学
6	HP管理運営委員会	委員	井上 航	明治大学

●2017年度 機械遺産委員会（第95期）

ID	委員会名	役名	氏名	勤務先名称
1	機械遺産委員会	委員長	吉田 敬介	九州大学
2	機械遺産委員会	副委員長	小野 寺英輝	岩手大学
3	機械遺産委員会	幹事	神谷 和秀	富山県立大学
4	機械遺産委員会	委員	石田 正治	名古屋工業大学
5	機械遺産委員会	委員	市原 猛志	九州大学
6	機械遺産委員会	委員	大久 保英敏	玉川大学
7	機械遺産委員会	委員	黒田 孝春	長野工業高等専門学校
8	機械遺産委員会	委員	権上 かおる	元（株）アグネ技術センター
9	機械遺産委員会	委員	星 朗	東北学院大学
10	機械遺産委員会	委員	村田 良美	明治大学
10	機械遺産委員会	委員		
11	機械遺産委員会	アドバイザー	池森 寛	西日本工業大学
12	機械遺産委員会	アドバイザー	緒方 正則	元 関西大学
13	機械遺産委員会	アドバイザー	堤 一郎	産業技術歴史文化研究所
14	機械遺産委員会	オブザーバー	高橋 征生	元 日本機械学会
15	機械遺産委員会	オブザーバー	福澤 清和	（一社）日本機械学会

●2017年度 工学・技術教育委員会（第95期）

ID	委員会名	役名	氏名	勤務先名称
1	工学・技術教育委員会	委員長	加藤 義隆	大分大学
2	工学・技術教育委員会	委員	岩本 光生	大分大学
3	工学・技術教育委員会	委員	齋藤 晋一	大分大学
4	工学・技術教育委員会	委員	佐藤 智明	神奈川工科大学
5	工学・技術教育委員会	委員	渡邊 辰郎	渡辺設計合同会社
6	工学・技術教育委員会	委員	佐々木 直栄	日本大学
7	工学・技術教育委員会	委員	田中 三郎	日本大学
8	工学・技術教育委員会	委員	田辺 基子	神奈川工科大学
9	工学・技術教育委員会	委員	結城 宏信	電気通信大学
10	工学・技術教育委員会	委員	後藤 彰彦	大阪産業大学

●2017年度 国際会議実行委員会（第95期）

ID	委員会名	役名	氏名	勤務先名称
1	国際会議実行委員会	委員長	綿貫 啓一	埼玉大学
2	国際会議実行委員会	幹事	佐藤 智明	神奈川工科大学
3	国際会議実行委員会	委員	堤 一郎	茨城大学
4	国際会議実行委員会	委員	緒方 正則	ブータン王立大学 ジグミ・ナムゲル工業大学
5	国際会議実行委員会	委員	星 朗	東北学院大学
6	国際会議実行委員会	委員	神谷 和秀	富山県立大学
7	国際会議実行委員会	委員	永井 二郎	福井大学
8	国際会議実行委員会	委員	筒井 壽博	弓削商船高等専門学校
9	国際会議実行委員会	委員	高藤 圭一郎	西日本工業大学

●2017年度 部門講演会実行委員会（第95期）

ID	委員会名	役名	氏名	勤務先名称
1	2017年度部門講演会担当	実行委員長	松野 建一	日本工業大学
2	2017年度部門講演会担当	幹事	丹治 明	日本工業大学
3	2017年度部門講演会担当	委員	中野 道王	日本工業大学
4	2017年度部門講演会担当	委員	長坂 保美	日本工業大学

5	2017年度部門講演会担当	委員	張 暁友	日本工業大学
6	2017年度部門講演会担当	委員	高木 茂男	日本工業大学
7	2017年度部門講演会担当	委員	増本 憲泰	日本工業大学
8	2017年度部門講演会担当	委員	神谷 和秀	富山県立大学

●2016年度 イブニングセミナー企画委員会（第94期）

ID	委員会名	役名	氏名	勤務先名称
1	イブニングセミナー企画委員会	委員長	小西 義昭	KoPEL小西技術士ラボ
2	イブニングセミナー企画委員会	委員	青山 哲夫	
3	イブニングセミナー企画委員会	委員	井上 航	明治大学
4	イブニングセミナー企画委員会	委員	奥村 喜勝	(株) ホンダアクセス
5	イブニングセミナー企画委員会	委員	工藤 正樹	東京都立産業技術高等専門学校 (品川)
6	イブニングセミナー企画委員会	委員	権上 かおる	元 (株) アグネ技術センター
7	イブニングセミナー企画委員会	委員	佐藤 国仁	(有) 佐藤 R & D
8	イブニングセミナー企画委員会	委員	田中 信璋	田中解析事務所
9	イブニングセミナー企画委員会	委員	夏目 左三郎	ロッテ商事 (株)
10	イブニングセミナー企画委員会	委員	平原 国男	平原生産技術事務所
11	イブニングセミナー企画委員会	委員	村田 良美	明治大学
12	イブニングセミナー企画委員会	委員	吉田 喜一	東京都立産業技術高等専門学校 (北千住)

●2016年度 イブニングセミナー実行委員会（第94期）

ID	委員会名	役名	氏名	勤務先名称
1	イブニングセミナー実行委員会	委員長	村田良美	明治大学
2	イブニングセミナー実行委員会	委員	小西義昭	KoPEL小西技術士ラボ
3	イブニングセミナー実行委員会	委員	吉田 喜一	東京都立産業技術高等専門学校 (北千住)
4	イブニングセミナー実行委員会	委員	工藤 正樹	東京都立産業技術高等専門学校 (品川)

●2017年度（第95期）学会委員会関連

機械遺産委員会	委員長	吉田敬介
機械遺産委員会	副委員長	小野寺英輝
ロードマップ委員会	委員長	小野寺秀樹
トピックス委員	委員	佐々木 直栄

●講演会担当

2017年度年次大会担当委員	委員	荻窪光慈
2018年度年次大会担当委員	委員	緒方 正則

●2017年度（第95期）部門研究会

ID	研究会名	役名	氏名	勤務先名称
1	持続可能なエネルギー利用に関する工学教育研究会	主査	佐々木直栄	日本大学
2	持続可能なエネルギー利用に関する工学教育研究会	幹事	大久保 英敏	玉川大学

日本機械学会事務局 技術と社会部門
担当 井上 理



日本機械学会技術と社会部門ニュースレター: <http://www.jsme.or.jp/tsd/news/index.html>

日本機械学会

技術と社会部門ニュースレターNo.36

(C)著作権:2017 一般社団法人日本機械学会 技術と社会部門

編集後記

日本機械学会 技術と社会部門 ニュースレターNo. 36 の発行にあたり

第95期の広報委員会委員長を預かります弓削商船高等専門学校の筒井でございます。技術と社会部門では久しぶりのお手伝いとなります。

さて、本誌では“わたしの「技術と社会」”と題し執筆者である諸先生の本部門活動に対する思いや研究対象との繋がりなどを話題として本号から新たに連載を始めました。最初に筆を取って頂きました緒方正則（元関西大学教授）先生には、只今赴任されておられますブータンでの見聞からハイライトをお伝え頂きます。この場を借りまして厚く御礼申し上げます。

本部門には専門の研究領域を異にする会員の方々が集い、日本機械学会の中でも小さくても一際ユニークな学際的活動が続けられて参りました。このような本部門の特性や活動の歴史を活かし本連載には会員の皆様から読んで楽しく為になるユニークな記事が沢山お寄せ頂けますので、引き続きご期待ください。

広報委員会の委員の方々のお力添えを頂きながら微力ではございますが進めて参りたいと思っておりますのでご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

2017 年度広報委員会委員長 筒井 壽博（弓削商船高等専門学校）

発行：一般社団法人 **日本機械学会**

The Japan Society of Mechanical Engineers

技術と社会部門

部門長 神谷和秀(富山県立大学)

事務担当 井上 理

2017 年 11 月 13 日発行

ISSN 2185-3177

編集：第 94 期 広報委員会

委員長 筒井 壽博（弓削商船高等専門学校）

幹事 関根 康史（福山大学）

委員 滝谷 俊夫（Hitz 日立造船）

小宮 聖司（神奈川工科大）

加藤 義隆（大分大学）

高藤 圭一郎（西日本工業大学）

吉田 敬介（九州大学）

日本機械学会技術と社会部門ニュースレター: <http://www.jsme.or.jp/tsd/news/index.html>

日本機械学会

技術と社会部門ニュースレターNo.36

(C)著作権:2017 一般社団法人日本機械学会 技術と社会部門